

『学語編』の訂正をめぐって

近藤 尚子

Connections in Two Editions of Gakugohen

Takako Kondo

要旨 積大典の編纂した語彙集『学語編』は、版本においていずれも同じ「明和九年」という刊記をもち、同じ版木を使用しているが、実際には三百箇所以上の異同を含む二種の版が存在する。それを初版と修訂版ととらえ、初版が修訂版でどのように訂正されたのかを明らかにし、その意味づけを試みた。訂正は大きく二つにわけられる。すなわち字句の訂正と返り点の補刻とである。八六七〇語の見出語のうち、訓の取り替えが行われているのが「蟻蝶」と「水馬」との二語である。その見出語と訓との状況はこの二語の歴史的、あるいは同時代的状況と重なってくる。また、返り点の補刻は上巻と下巻とでかたよがりがあり、それは『学語編』初版の作成段階で返り点を付すという方針が固まってきたという事情を反映しているのではないかと考えた。

I

はじめに

『学語編』二巻二冊は積大典（享保四年一七一九〜享和元年一八〇一）の編になり、明和九年に出版された。本稿はその出版の過程で施された訂正について報告し、その意味の一端を明らかにしようとするものである。

『学語編』の版種については以前すでに言及したことがあるが、これまで二十一本を調査し、大きくは四種の版を得ている。その四

種を書肆と刷りとから以下のように呼ぶ。

河南版 a 河南版 b 瀬尾・小林版 脇坂版

これまでに調査し得た二十一本のうち河南版 a は二本（うち一本は下巻のみ）、河南版 b は一本、瀬尾・小林版一本で、あとはすべて脇坂版である。河南版 a・b、瀬尾・小林版はかなり数が少ないという感触を得ている。

河南版 a・b の巻末にはつぎの三書肆名がみえている。

* 今野 尚子 本学助教 国語学

二條通堺町西入町

瀬尾源兵衛

堀河通佛光寺下ル町

浅井庄右衛門

河南四郎右衛門

この三書肆名をもつ本として今のところ架蔵本二本（うち一本は下巻のみ）と『唐話辞書類集』第十六集所収本の三本を見出している。しかし架蔵本と『唐話』本との間には三百箇所以上の異同がある。同じ三書肆名をもちながら、架蔵本二本を河南版a、『唐話』本を河南版bと区別したのはこのためである。「河南四郎右衛門」を削って「醒井通魚棚上ル町／小林庄兵衛」を加えたものを瀬尾・小林版と呼ぶことにする。これまでのところ陽明文庫本一本である。さらに「瀬尾源兵衛」を削って「脇坂仙二郎」を加えたものを脇坂版と呼ぶ。現在目にする『学語編』は大部分がこの脇坂版である。いずれも版木は同一で、先述の河南版a・b間の異同は、bの状態が以下の瀬尾・小林版、脇坂版に受け継がれている。さらに丁を改めて別の書肆が目録などを加えた本も多く、版權はかなり多くの書肆の間をわたったものと思われる。このことから『学語編』においては初版出版からすぐの時期に訂正が施され、その版木が以後ずっと使用されたということがわかる。河南版b以下の諸版には異同がなく、内容的には河南版aと以下の版とで大きく二つにわかれることになる。そこで本稿では河南版aを初版、以下の三版を修訂版ととらえ、初版から修訂版への訂正がどのように行われたかを考察する。

先述のように三百箇所以上の異同が見出され、版木が同一である

ところから考えれば、これらの訂正は埋木をして彫りなおした「修」である。『学語編』は上下巻合わせて百三丁あり、一丁平均三箇所に手が加えられていることになる。しかも見出語の訂正といった大きな字に関わるものは少数であり、訓や返り点などの細かいものが大部分である。三百箇所という数字は訂正への強い意欲を感じさせるのであるが、その源をも考えてみたい。

I

さて一口に訂正といってもそこにはさまざまものが含まれる。それらを大きく二つにわけるとつぎのようになっていく。

字句の訂正 二九

返り点 二九六

まずは字句の訂正からみていく。初版で不鮮明であった箇所や誤っていた箇所を彫り直している例である。そのうち見出語を訂正しているのがつぎの三例である。⁽²⁾

上二二ウ5 袴背匠（へウグシ）↓袴背匠

上四五オ7 俠腸義義タノモシイ↓俠腸義氣

下一九ウ2 銭三脚子ゴトク↓鐵三脚子

袴は背と同字であり、「袴背」のほうが見出語として適切であるという判断であろう。あとの二例はいずれも明らかな誤刻を訂正したものである。

つぎに訓に手を加えているものをみていく。初版の河南版aから付されていた訓を何らかの理由で彫りなおしたと思われるものが一九例ある。これには濁点や欠けていた部分を加えたと思われる例が含まれるが、比較に使用できる河南版aが現在のところ上巻では一

本しかなく下巻でも二本しかないので、判断はむずかしいところがある。なお、河南版bも一本しかないが、これは以後の版に受け継がれているので確認することは可能である。訂正が明らかに確認できるものとして

- 上二二ウ3 染戸タモノヤ↓ソメモノヤ
 - 上五オ7 田濤タノミヅトルトコロ↓タノミヅトルトコロ
 - 下二一ウ4 漫理シダレヤキバ↓ミダレヤキバ
- がある。最初の「タモノヤ」はソの第一画が版下でよくみえず、第二画とメとが合わさってタとなったものであろう。第二の例もゾの第一画を補刻したものである。第三の例はシとミとの誤りを訂正したもの。ところで上三ウ5「冬住」には河南版aで「冬至マヘノ日」とあった訓が河南版b以下では「冬至ヘノマヘ、日」となっている。ヘノは至とマとの間の右傍に小書きされており、ノを挿入しようという意図がうかがえるが、もともとあった「マヘノ日」のノをなぜ、のように改刻したのかは不明である。
- 河南版aで印刷が不鮮明であったり欠刻があったために彫りなおしたと思われるのが次の箇所である。
- 上五オ4 缸トビコヘ(濁点)
 - 上五ウ2 澆田タニミヅシカケル(濁点)
 - 上一三ウ2 曾祖王父ヒヂイ
 - 上一三ウ7 姉妹ヘ父ノイモトナリ
 - 上三六オ3 手勢シカタスル
 - 上四六オ2 併榻イツシヨニザスル(濁点)
 - 下七オ6 朱銃シユズミ
 - 下八ウ4 褐腐コンニヤク

下八ウ4 塩壘ツケモノ

下二八ウ3 印池インニクイレ

下三八ウ3 稽スベ

下四六オ4 常山クサギ

下四六オ4 桃葉珊瑚アヲキ

下五〇オ3 天鷲ヒバリ

一般に初版というのは刷りが鮮明なものであるが、『学語編』にはこのように初版で不鮮明な箇所がみられる。その事情は不明であるが、刊行を急いだものかとも考えられる。このほか上四八オ4「仙標」には初版「ツネノヒナデノヒ」とあったものが河南版b以降では「ツネノヒトデノヒ」となっている。これは「ツネノヒトデナヒ」とあるべきところで、河南版aでは二つ目の「ノ」は「ナ」の第一画が欠けているようにみえる。しかし修訂版では欠けがないようにみえ、判断に迷うところである。同様の例が下四六オ7「柳條穿」の訓「カラタチバナ」の「ナ」にもみられ、こちらは初版からの第一画の欠けが修訂版でも確認できる。初版にはみえているのに河南版b以降で欠けてしまい、そのままになっていると思われるのが上二五オ2「山師ニワツクリ」である。訓の二字目の「ワ」が修訂版ではみえず、「ニツクリ」になってしまっている。

『学語編』は通常、見出語の左傍に「訓」を施すのであるが、いわば第二訓として右傍にも訓を添えることがある。なぜ左傍なのか、右傍の訓はどのように位置づけられるのかについては後考をまつこととしたいが、この左右の訓を加えた箇所が四例ある。まず左傍訓を加えているのが次の二例である。

- 上七ウ1 拽石イシヲヒク

下四六オ2 檣イチイ

上七ウ1の例は前後を含めて示すと「擡石イシヲカク 拽石イシヲヒク 轉石イシヲコカス」となっている。「イシヲヒク」がない河内版aでは「拽石」の訓も前項と同じ「イシヲカク」であるという事になってしまふ。そのために必要な訓であった。一方の「イチイ」であるが、見出語の「檣」は一般には「アフチ」である。この一行を示してみると、「白桐キリ 檣イチイ 檣 槐エンジユ 檣ケヤキ 檣ヒサガキ 檣ヒヤンチン 梶クチナシ」となっている。「檣」の次の見出語が「檣」なのである。あるいはここには「アフチ」そして次の「檣」に「イチイ」を付すべきところを誤ってしまつたのかもしれない。

右傍に訓を加えた例は二例であるが、どちらもすでに左訓が付された語である。左訓と後から加えられた右訓の順にあげる。

上四オ5 秀壁タカキヤマ／ラビエタヤマ

上四ウ8 水撈ミヅニツカル／テヲミヅニツケル

「秀壁」の「ラビエタヤマ」は見出語と左訓とからみて「ソビエタヤマ」とあるべき訓であろう。先に挙げた「タ↓ソメ」「ゾ↓ツ」「シ↓ミ」のような誤りがここでふたたび起こっていることになる。しかし「ラビエタヤマ」は後から付された訓であり、訂正されることとはなかつた。

もうひとつ構成に関わる訂正として身體類の細分類に「面」が加えられている。これも見出語の排列から考えて必要な細分類である。

II

これまでは明らかな誤りの訂正や補刻について述べてきた。『学語編』には修訂版において訓が訂正されている例が二例みられる。それは下巻末近くの虫彙類に掲載されている「蟻蠓」と「水馬」という二つの項目である。ここでは節を改めてなぜこの二項目の訓が訂正されたのかを考えてみたい。先ず訂正のようすをあげておく。

下五一ウ4 蟻蠓カツラムシ↓マクナギ

下五一ウ5 水馬シヲウリ↓カツラムシ

「水馬」の訂正後の訓は「ツ」の二点がかなりつぶれており後の版では「フ」のようになってしまつているが、二点を確認できる刷りがあり、カツラムシである。ここでこのカツラムシが訂正前と訂正後とで異なる語に付されていることが注目される。これと同じような状況を、『学語編』より六〇年ほど前、正徳年間に出版された『和漢三才図会』に見出すことができる。まず「蟻蠓」は巻第五十三化生類にある。見出語「蟻蠓」の右傍に「かつをむし／まくなき」が並んでいる。左には「モツモン」という音が示されている。見出語の下に「醯鷄」という語形が示され、へ和名加豆乎蟲／又云末久奈木とある。「醯鷄」は『学語編』では「蟻蠓」の次の項目として立てられ、「スニワクムシ」の訓が付されている。見出語の上には図があり、本文は『三才図会』『爾雅』からの引用と按文とからなる。一方「水馬」は巻第五十四湿生類にある。見出語の右に「かつをむし」左に「しほり」とある。下には「水鼈」という語形が示され、へ俗云鯉蟲(右訓カツラムシ)／又云鹽賣(右訓シホリ)と

とある。本文は『本草綱目』『五雜俎』と按文とからなる。訓の左右の異なりはあるが、「蟻蠓」にカツラムシ・マクナキが、水馬にカツラムシ・シホウリが示されていることを確認しておきたい。つまり、『和漢三才図会』の立場からみれば、『学語編』初版と修訂版で付されたそれぞれの訓はどちらの見出語のどちらの訓も可能であるということになる。しかし『学語編』は「双ルビ」が可能であるにもかかわらずそれぞれの前訓をわざわざ削って埋め木をし、新しい訓を付しているのである。『学語編』上下二巻にわたってわずかにこの二項目のみにこのような訂正を施していることにどのような意味を見出すことができるのであろうか。

『和漢三才図会』に影響を与えた資料の一つとされている『訓蒙図彙』には「蟻蠓」ではなく「蠓」が収載されている。見出語「蠓」の右傍に「もう」、左傍に「ぼう」の音が示され、下に三行にわたって注文がある。「まくなき蟻蠓（めつまう）也其飛磗則／天風春則天雨。醯鷄今按／俗云しやう／甕中蟻蠓也」という注文である。「磗則天風春則天雨」は次の『和名類聚抄』の記事に示されているように『爾雅』からの引用であり、「醯鷄（さんけい）」³は先述の通り『和漢三才図会』では「蟻蠓」の下に示されている。一方の「水馬」は右傍に「すいば」とあり、下に「今按俗云しほウリ／一名水甕（すいばう）。水蠶（すいたい）今按／ゑびむし化為蜻蛉者也」という注文がある。しかし『訓蒙図彙』では「蠓」にも「水馬」にも「かつをむし」という訓はみられない。ちなみに両書の図はこの二項目に関してよく似ている。蟻蠓（『訓蒙図彙』は蠓）は小虫であり、水馬はアメンボのことである。

「蟻蠓」における「かつをむし・まくなき」並記はすでに『和名

類聚抄』にみられる。二十巻本の元和三年古活字版では卷十九蟲彖類第二百四十に収められている。

蟻蠓 爾雅集注云蟻蠓へ上亡結反下亡／孔反漢語抄云／加豆乎無之日本紀／私記云蠓末久奈木／小虫亂飛也／磗則天風春則天雨

ここに蟻蠓の和名として「加豆乎無之」と、蠓の和名として「末久奈木」が示されている。『和名抄』には『日本紀私記』からの訓が引用されているが、『日本書紀』允恭天皇二年二月に蠓が登場する。そして「山に行かむときに、蟻擾はむ」の蠓に対して「蟻、此云摩／愚那岐」という訓注が付されているのである。『類聚名義抄（観智院本）』でも同じように「マクナギ・カツラムシ」が並記されている。⁴つまり蟻蠓に対しては早くからカツラムシ・マクナキ（マクナキは『日本書紀』の表記によればマグナキ、『類聚名義抄』の声点によればマクナギで『学語編』もマクナギとなっているが、いまそれは問わない）の訓があてられていたことがわかる。

一方の水馬は唐詩⁶などには登場するようであるが、日本では蟻蠓ほど古い資料には見出しがたい。しかも蟻・蠓のように単独でも意味を持たば古辞書に載せられることもあるが水馬という語とそれを構成する水、馬という二つの漢字それぞれとは持つ意味が全く異なっている。『書言字考節用集』には「水甕」が載せられている。右に「シホウリ」左に「シホカラムシ」の訓が付され、一名「馬」〔本草〕長寸許四／脚群游水上水涸則飛」という注記があり、そこに「一名」というかたちで水馬があげられている。「水甕」と「水馬」との関係は先ほどの『和漢三才図会』や『訓蒙図彙』とは逆である。〔本草〕という引用で明らかのように水馬は本草学の隆盛と共に記

録されるようになったものと考えられる。林羅山の『多識編』には「水黽」が収載されている。「水馬」のほうは自筆草稿・寛永七年古活字版にはみえないが、寛永八年製版本になると「水黽」の異名として掲載されているのである。このあたりで水馬は文献に登場するようである。ただし、通常万葉仮名で示される和訓はこの語には付されていない。『学語編』とはほぼ同時代の『物類称呼』にも「水黽」は掲載されている。「水黽」という見出語のすぐ下には「てふま」という語形が示されているが、これは以下の本文から江戸の「称呼」であることがわかる。最初の部分を引用すると「てふま○畿内にて・ミづすまし又かつをむし江戸にて・てふま西国にて・しほうり又あめだか又あめかた又じやうせんかようなど云（以下略）」となっており、都合十四の方言形があげられている。ここに畿内の語形として「かつをむし」が、西国の語形として「しほうり」がみえている。『本草綱目啓蒙』では「水黽」に六〇以上の方言形が示されており、その中にやはり「カツホムシ」(畿内)、「シホウリ」(西国／若州)がみえている。その解説の中に「甚ダ毒アリ鶏犬モコレヲ食ヘバ死ス」とあり、これが本草学で取りあげられる所以であると考えられる。一方これらの『多識編』『物類称呼』『本草綱目啓蒙』には「蟻蠊」は掲載されていないのである。

歳時記の類には蟻蠊、水馬ともにふれられることが多い。元禄十一年(一六九八)刊の『俳諧新式』『四季詞』の中、五月に「水馬(カツホムシ)」、六月に「蠊(マクナキ)へ酒にわく狸々と／いふむしといふ」とある。『改正月令博物笈』には五月の部に「水馬(みずすまし)」があって、(△鯉虫△錫賣とも云池川にあり尾も頭も尖り黒赤色にして鯉節に似たり一説味甘く錫の如しともいへり)と注

する。同じく六月の部に「蠊」がある。こちらは右「まくなぎ」・左「かつほむし」の双ルビであり、目録も同様である。注は(俗に水道蠊(すいどはへ)といふものも夏酒などに生じたるもの也)とある。幕末の『増補／改正』俳諧歳時記雑草』にもこの二つの語は掲載されている。卷二夏の部に「蠊(まくなぎ)」がある。やはり「六月」とする。注はほとんど『和漢三才図会』の「蟻蠊」を引き写したものである。一方の水馬は「水馬虫(すゐはむし)」として「す」の五月に掲載されている。注は(漢名水黽「わくかせわ」其身細長く五六分ばかりの黒き虫也、長き四足あつて、身ハ水につかず、水上を駆ること馬のごとし、依て水馬と名づく、畿内西土にて塩賣江東の児童シランシホといふ、筑紫にてアメカタといふ、其臭地黄煎の臭也、関東ノケンボツホウ○其色黒赤にして鯉節に似たり、故に鯉虫といふ、一説に此虫味甘く、錫に似たり、故に錫賣○今江戸の方言にアメンボウといふ、)となっている。最初の○の後「鯉虫」に関する注は『改正月令博物笈』の記述とよく似ている。しかし「鼓蟲(まひくむし)」の注にやはり『わくかせわ』を引用し、(関東にて水スマシ又サウトメといふ是也、然るに得て水すましハ水馬也と思へる輩多し、去ル句合に、水馬の題にて、藻の花を休ミ所や水すまし、)としたるあり、是件の取ちかひ也、云々として、水馬||みずすまし説を批判している。

「蟻蠊」や「水馬」が実際には何にあたるのかを追求することは本稿の目的ではない。まずは『学語編』初版から修訂版で付けなおされた「カツラムシ」「マクナギ」「シホウリ」という訓が、初版の状態でも誤りとはいえないということを確認しておきたい。しかしそれをわざわざ彫りなおしているという事実は何らかの積極的な原

因を予想させる。今のところ決め手になるものは提示できないが、蟻蝶に対する「カツラムシ・マクナギ」は古くから近世に至るまで生き続けていた。この二つの称呼は並記されることが多いが、歳時記など俳諧関係のものには「マクナギ」のみを載せることも多い。

一方の水馬は古い文献には見出せず、近世になってから登場する。「カツラムシ・シホウリ」の訓もあてられるが、それ以外の称呼も多い。どれがスタンダードとは一概にいえないようである。『物類称呼』『本草綱目啓蒙』によれば畿内の称呼として「カツラムシ」があげられている。『学語編』の動きはこのあたりの状況と重なってくるように思うのである。二つの訓を別個に替えたのではなく、「水馬」をシホウリからカツラムシに替え、それに伴ってカツラムシを付していた「蟻蝶」をマクナギとしたのではないだろうか。

III

これまで字句に関わる訂正についてみてきたが、『学語編』には河南版bの段階で見出語に返り点を加えたものが二九六項目ある。返り点というのはひじょうに細かいものであるから、Iで取りあげた訓の訂正以上に細かい作業を要することになる。それを上下二巻にわたって約三〇〇箇所も施しているのである。その具体例をみるとつぎのようになっている。以下、印刷の煩雑を避けるため返り点の箇所は・で示すことにする。

上五オ4 度索尋檀ナワワタリ↓度・索尋・檀(それぞれにレ点)

上二五オ3 相手紋テノスヂミ↓相・手紋・(上が二、下が

一)

下一四ウ4 随價酬直ネダンノマ、ニハラフ↓随・價酬・直(それぞれにレ点)

下三五ウ5 績綿花ワタヲツグム↓績・綿花・(上が二、下が一)

上下それぞれの巻からレ点が二つ加えられている例と二二点が加えられている例を挙げた。この返り点の訂正も全巻にわたっている。このことにはどのような意味が見出されるのであろうか。

まず見出語に返り点を付すとはどのようなことであろうか。釈大典の著作としてよく知られている『詩語解』『文語解』『詩家推敲』をみると、見出語に返り点は付されていない。もちろんこの三書はいわゆる助字の類が中心であり、『学語編』は名詞が中心であるという見出語の性格の異なりにもよるのかもしれない。しかしこの三書の本文では、用例として示されている文に返り点が付されているのである。この方法は『学語編』が参考文献として凡例に掲げている『名物六帖』でも同様である。すなわち『名物六帖』でも見出語に返り点は施されていないが、用例には施されているのである。一方で例えば享保年間に出版された岡嶋冠山の著作である『唐話使用』・『雅俗語類』などをみると見出しとなる表現には四声・訓点・官音が付され、見出しに続けて細字双行の訳文が示されている。ここで見出語は、四声・訓点・官音を付すことによって中国語とその直訳となる日本語とを同時に示すことが可能となっているのである。たとえば『雅俗語類』の巻一、一ウ7に「生隙」という語がある。漢字にはそれぞれ平・入の声点が付され、右傍の「スエンキツ」という「官音」によってこれを中国語として発音することができる。一方レ点と送りがないことによって「隙ヲ生ス」とよむことができる。

そして見出しの下にはへ中ノワルク／ナル」という訳が添えられている。つまり訓点を付すとは、その見出語が単なるタイトルとしてではなく、文としてそこに示されているのだという姿勢のあらわれととらえることができるのではないだろうか。『名物六帖』のような見出語に返り点を付さない示し方は用例によって初めてそれが文としてどのように運用されるかがわかるのである。もちろんこれはどちらがよいという問題ではなく、語彙集としての編纂の姿勢の問題ということになる。

ところで同じ冠山による『唐話纂要』の版本には興味深いことがある。『唐話纂要』は享保元年（一七一六）に出版された。後に巻六が増補されるが初版は五巻である。この五巻がどのような構成になっているかを簡単に示す。

巻一〜巻三前半 二字話至六字話

巻三後半 常言

巻四 長短話

巻五 (語彙集)・数目・小曲・疋頭

○字話というのは漢字で二字から六字までの表現、常言とは格言、長短話とは会話である。巻五に(語彙集)としたものはタイトルがなく、「親族・器用・畜獸・蟲介・禽鳥・龍魚・米穀・菜蔬・果蔬」として意義分類された語彙集である。最後の「疋頭」には織物関係の語が集められている。

さてこの五巻の中で見出語に返り点が付されているのは、四字話の途中にあたる巻二の五丁表から長短話の巻四までである。『唐話纂要』は他の二書のように見出しの漢字に四声を施していないため、返り点のない巻頭から巻二の四丁までは見出語に「官音」が添

えられているだけである。もちろん下には訳が示されてはいる。「返り点無し」から「返り点有り」に移る巻二の四丁裏から五丁表をながめると、この二通りの示し方が与える印象の異なりが実感できる。何が原因でこのような状態になったのか、あるいは以後の版で訂正が施されたのかどうかについて今述べる準備は筆者にはない。しかし、六巻の増補本でこの状態であるから、このかたちで流通する版本が多かったのではないだろうか。

IV

『学語編』は約八六〇〇語を上下二巻に「類」と細分類とによって内容別に排列するという方法を採用している。⁽⁷⁾先に、返り点の訂正が全巻にわたっている、と述べたが、詳細にみていくと、その分布にはかたよりがあることがわかる。〈表〉は、『学語編』全巻の類・細分類の項目数と訂正とを一覧にしたものである。表中の数字は左から①総項目数②字句の訂正されている項目数③返り点の加えられている項目数④初版ですでに返り点のみられる項目数である。まず①総項目数は上巻四三二七、下巻四三三二でほとんど変わらない。そしてI・IIでとりあげた②字句の訂正されている項目数も上巻一八、下巻一三でそれほど差はない。ところが③返り点の加えられている項目数に関しては上下巻に大きな差がある。つまり、上巻の訂正は二一五であるのに対し下巻は八一で、上巻には下巻の約二・五倍の箇所に戻り点が増えられているのである。これは何を意味するのか。

この問題について考える手がかりとして〈表〉にはもう一つ、④初版ですでに返り点のみられる項目数を加えておいた。これをみる

『学語編』の訂正をめぐって

〈表〉『学語編』各類の項目数と訂正一覧

『学語編』の類と細分類を排列順に掲げる。

数字は総項目数/字句の訂正項目数/返り点の訂正項目数/初刷から返り点を付した項目を示す。

類	内 訳	類ごとの合計
天文	日月星17/0/1/1 雲雨27/0/0/0 風18/0/2/0 雜25/0/2/0	87/0/5/1
時令	昼夜42/0/10/0 日30/0/3/0 時20/0/6/0 月22/0/3/0 歳61/1/2/0	175/1/24/0
地理	山19/1/0/0 水64/1/7/0 海14/0/1/0 橋梁7/1/1/0 田畝50/2/8/0 邦域41/0/1/0	341/6/22/0
	市街22/0/0/0 道路12/0/2/0 土地64/0/0/0 沙石26/1/2/0 墳墓22/0/0/0	
朝廷	78/0/9/0	78/0/9/0
居処	城郭32/0/0/0 官舎26/0/1/0 家宅120/0/3/0 行舗30/0/0 屋材63/0/1/0	399/0/7/0
	壁障23/0/0/0 瓦葺23/0/0/0 門戸43/0/0/0 宅邊26/0/2/0 器具13/0/0/0	
人倫	160/2/0/0 称呼158/0/3/0 姓籍52/0/0/0	370/2/3/0
人品	君臣46/0/0/0 士庶96/0/0/0 職役115/0/0/0 備役82/0/2/0 産業215/2/5/0	765/3/15/1
	下賤23/0/0/0 文藝62/1/1/0 女流65/0/0/0 姦兇61/0/7/1	
釈道	54/0/0/0	54/0/0/0
鬼神	45/0/0/0	45/0/0/0
官職	76/0/0/0 典客11/0/0/0 行儀29/0/0/0 武官25/0/0/0 火役8/0/0/0	276/0/17/0
	雜役26/0/0/0 獄役17/0/1/0 総称63/0/10/0 禄米21/0/6/0	
政刑	119/0/2/0 争訟400/0/7/0	159/0/9/0
身體	首45/0/3/0 眉7/0/0/0 目66/0/0/0 耳21/0/2/0 鼻13/0/1/0 口46/0/3/0	452/2/18/6
	面21/1/2/0 手21/0/1/4 足15/0/0/2 躰貌86/1/3/0 睡臥27/0/2/0 疾疵84/0/1/0	216/0/13/24
性情	113/0/3/1 愜意20/0/0/0 忤意29/0/11/0	162/0/14/1
言語	129/0/11/0	129/0/11/0
行事	129/0/5/1 卜事12/0/4/0 動作56/0/22/0 歩行15/1/1/0 使役18/0/0/0	230/1/32/1
生産	34/0/1/0	34/0/1/0
交遊	46/0/1/2 交情69/1/3/1 謁見30/1/2/7 宴会24/0/1/1	169/2/7/11
行旅	42/0/7/1 音信19/0/1/2	61/0/8/3
文才	学文24/0/0/3 詩文31/0/1/0 才名26/1/0/0	81/1/1/3
伎戯	35/0/4/0 優戯27/0/0/0	62/0/4/0
雜語	188/0/8/0	188/0/8/0
	上巻計	4317/18/215/27
生齡	生33/0/4/0 長26/0/0/0 老40/0/1/3 病38/0/0/6 死65/0/3/12 枉死14/0/0/3	
書記	103/0/0/0 書冊39/0/1/0 法帖12/0/0/0	154/0/1/0
畫軸	26/0/3/6 裱背39/0/2/0	65/0/5/6
文具	紙46/0/0/1 筆31/0/0/11 墨15/0/0/2 文房19/1/2/1	111/1/2/15
飲食	84/0/4/0 菜品24/2/0/1 食事62/0/1/3 果子85/0/0/0 酒48/0/0/0	328/2/5/5
	醬豉9/0/0/0 茶16/0/0/1	
衣服	絹紬46/0/0/0 綿布24/0/0/0 衣服145/0/4/2	215/0/4/2
財産	65/0/2/0 賣買46/0/9/3 収支30/0/1/0 借債20/0/1/1 簿計30/0/5/0	221/0/18/4
	税賦30/0/0/0	
金玉	金具72/0/0/0 珠玉21/0/0/0	93/0/0/0
磁器	47/0/0/0	47/0/0/0
漆器	31/0/0/0	31/0/0/0
響器	41/0/0/0	41/0/0/0
火燭	54/1/0/3 燈燭47/0/4/0 炮烽11/0/1/0 火災7/0/0/2	119/1/5/5
刀鐵	62/0/0/0	62/0/0/0

類	内 訳	類ごとの合計
兵器	107/1/0/8	107/1/0/8
耕具	54/0/1/2	54/0/1/2
舟輿	舟110/0/2/1 輿35/0/3/0	145/0/5/1
食器	76/0/0/0 酒器20/0/0/0 茶器47/0/1/0	143/0/1/0
香具	55/0/2/0	55/0/2/0
数量	69/0/1/0	69/0/1/0
印記	28/1/0/0	28/1/0/0
身具	95/0/5/1 女具25/0/0/0 笠類24/0/0/4 履類32/0/1/3	176/0/6/8
家具	筵席32/0/0/0 床椅13/0/2/0 几案20/0/1/0 屏障8/0/0/0 帷箔16/0/0/0 櫛桁6/0/2/0 箱櫃18/0/0/0 釜竈41/0/1/0 水器26/0/2/0 厨具36/0/0/0 掃具22/0/0/0 梯5/0/0/0	243/0/8/0
雑器	筐籃29/0/0/0 花瓶20/0/2/0 玩具40/0/1/0 條繩43/0/0/0 染色51/0/0/0 紡織39/0/1/5 漁猟16/0/0/2 用具31/0/0/0 雑具102/0/0/0	371/0/4/7
五穀	76/1/0/0	76/1/0/0
食菜	171/0/0/0	171/0/0/0
花草	148/0/0/0	148/0/0/0
雑草	209/0/0/2	209/0/0/2
花木	43/0/0/0	43/0/0/0
樹竹	110/3/0/1	110/3/0/1
果蔬	80/0/0/0	80/0/0/0
鱗介	165/0/0/0	165/0/0/0
飛禽	102/1/0/0	102/1/0/0
走獸	55/0/0/0	55/0/0/0
虫豸	100/2/0/0	100/2/0/0
	下巻計	4353/13/81/90
	総 計	8670/31/296/117

と③と数値のうえで上下巻がちょうど逆転するような状況であることがわかる。上巻の二七に対し下巻は九〇で、下巻は上巻の三倍強である。とくに上巻の④の数値の分布をみると、身體類に六例とまとまって出現するが、それまでにはわずかに二例のみみえるだけである。この六例は上三五丁裏に集中的に現れる。つまり『学語編』初版においては三五丁表までにはほとんど返り点が付されていないのである。河南版りでは上巻に二一五箇所の返り点が加えられていることを考えれば、上巻に収められている項目には返り点が必要なかったのではないことは明らかである。おそらく初版の版下作成の段階では見出語に返り点を付すという方針は明確ではなかったであろう。上巻の半ばを過ぎた三五丁あたりから下巻の九丁までは初版でも返り点がかかり付されている。しかしそれでも初版の上下巻合わせて一一七箇所に対して河南版りでは二九六箇所が加えられ、総計四一三の見出し語に返り点が付されることとなった。初版の最初の段階では明確ではなかった方針がおそらく途中から返り点を付すという方向に向かい、初版では不完全であったものを修訂版で集中的に手直した、ということなのではないだろうか。訂正への強い意欲が感じられると述べたが、その契機は実はこのあたりにあると考えられる。

ここで先ほどの岡嶋冠山の『唐話纂要』に戻ると、この書は冠山の唐話入門書としては最初のものである。巻二の四丁までは返り点が付されていないというのも単なるミスということではなく、方針が固まりつつあった状態を反映しているともみることができるとも思えない。この書が二字話から始まるということも、最初に返り点を欠いていることとかかわりがあるかもしれない。享保三年に増補さ

れた巻六「和漢奇談」は「有点四声」として、冠山の以後の著作と同様、四声・訓点・官音並記の形式をとっている。

おわりに

『学語編』の初版から修訂版への訂正を報告し、背景となる状況を検討しつつ考察を加えてきた。訂正の抛り所を明確にすることは困難であるが、小冊と云っていいこの書に三〇〇箇所以上の訂正を施す作業は並々ならぬ意欲を感じさせる。明らかな誤刻の訂正を別にすれば、訓の入れ替え、返り点の補刻についての意図にもまだ検討の余地がある。まずは状況を報告し、みわたす資料の幅を広げ今後とも考察を重ねていきたい。

(註)

- 1 拙稿「訓の表記からみた『学語編』——辞書の編集方針とのかかわり——」『文化女子大学紀要 人文社会科学研究』第四集 一九九六年一月 なおこの中で稿者は河南版 a・b を瀬尾版 a・b としているが、本稿により河南版と改める。
- 2 以下引用に際しては印刷の煩雑を避けるため、必要な部分のみを掲げることがある。見出語に続くカタカナは原本では左傍訓である。また『学語編』は同じ訓のあたる複数の見出語については最初の語にのみ訓を示す。(カタカナ) は当該見出語には訓がないが、その訓があたるということを示す。へ／＼内は細字双行、／は改行である。
- 3 「さんけい」は右傍のふりがなである。ただし正しくは「ケイケイ」
- 4 厳密に言えば「カツラムシ」とあって、ラの右にヲが傍書されている。『倭玉篇』ではたとえば慶長版で蝶に「カツラムシ」、蠅に「カツラムシ」とある。寛永五年版には蝶はなく、蠅に「カツラムシ」とよめる訓がある。寛永九年版では慶長版と同じく蝶に「カツラムシ」、蠅に「カツラムシ」とある。延宝九年の『新刊書引倭玉篇』では蝶・蠅ともに「カツラムシ」とみえる。ただし架蔵本は蝶のラの位置に紙の繊維があり、その

ためにラのようにみえるのかもしれない。いずれにしてもこれらのゆれはラとラとの字形相似によるものと考えられるが、『名義抄』と『倭玉篇』とで同じような現象がみられ興味深い。

5 杜甫の「大曆三年春白帝城放船出瞿唐峡久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻」に「雁兒爭水馬」という表現がある。『杜甫全集第四卷』(統国訳漢文大成)復刻愛蔵版 昭和五三年)には「水馬 蝦の細小なるものの類かといふ」とある。

6 『字鏡集』(白河本・天文本)には蠓に「マクサムシ」、蟻にも「マクサムシ」と「マクナキ」とがあげてある。

7 類・細分類については拙稿『名物六帖』と『学語編』と(『文化女子大学紀要 人文社会科学研究』第五集 一九九七年一月)参照。